

長歌

幸 讃岐國 讃岐の国の さぬきのくにの 帝が讃岐の国の	安益郡之時 安益の郡に幸す時に あやのこほりにいでますときに 安益郡に行幸された時に	軍王 軍王が こにきしのおほきみが 軍王が	見山 山を見て やまをみて 山を見て	作歌 作る歌 つくるうた 詠んだ歌	
霞立 霞立つ かすみたつ (枕詞)	長春日乃 長き春日の ながきはるひの 長い春の日は	晩家流 暮れにける くれにける 暮れたことも	和豆肝之良受 わづきも知らず わづきもしらず 分からず	村肝乃 むらきもの むらきもの (枕詞)	心乎痛見 心を痛み こころをいたみ 胸が痛むので
奴要子鳥 ぬえこ鳥 ぬえことり (枕詞)	ト歎居者 うら泣き居れば うらなきをれば 忍び泣いて	珠手次 玉たすき たまたすき 玉襷ではないが	懸乃宜久 懸けのよろしく かけのよろしく 懸けて思うべく	遠神 遠つ神 とほつかみ (枕詞)	吾大王乃 我が大王の わがおほきみの 我が大王の
行幸能 行幸の いでましの 行幸された地の	山越風乃 山越す風の やまこすかぜの 山を越えた風が	獨座 ひとり居る ひとりをる 一人でいる	吾衣手介 我が衣手に わがころもでに 我が衣の袖に	朝夕介 朝夕に あさよひに 朝も夕も	還比奴礼婆 返らひぬれば かへらひぬれば 帰れと吹くので
大夫登 ますらをと ますらをと 俺は男だと	念有我母 思へる我れも おもへるわれも 思っているも	草枕 草枕 くさまくら (枕詞)	客介之有者 旅にしあれば たびにしあれば 旅の途中だから	思遣 思ひ遣る おもひやる 思いを晴らす	鶴寸乎白土 たづきを知らに たづきをしらに 術もなく
網能浦之 網の浦の あみのうらの 網の浦の	海處女等之 海人娘子らが あまをとめらが 海女乙女たちが	焼塩乃 焼く塩の やくしほの 焼く塩のように	念曾所焼 思ひぞ焼くる おもひぞやくる 焼け焦がれる	吾下情 我が下心 あがしたごころ 切ない心のうちよ	万葉集卷一 5 軍王